中国・大学生就業活動中の社会的ネットワークの役割

——復旦大学と蘇州大学でのアンケート調査より——

堀口正
大竹章友

キーワード：大学生，就業活動，社会的ネットワーク，上海出身者

（概　要）

本稿は，中国の大学生が就職活動時に社会的ネットワークを利用することについて，どのように考え，またどのような時にそれが有効なのかを復旦大学と蘇州大学でのアンケート調査を通じて考察している。記述統計やクロス集計表などの分析の結果，おおよそ両大学の学生ともに，外資系企業への就職を希望しており，就職活動時，社会的ネットワークを利用することに肯定的な考えをもっている。しかしながら，その利用の傾向（考え方）は，復旦大学の上海出身者で女子学生であるほどそれが強まることが明らかにされている。

はじめに

1978年以前の中国では，公有企業は「固定工」制度を採り，一旦雇用した労働者は企業の経営状態に関係なく，定年まで解雇されないというものであった。いわば「中国版の終身雇用制度」である。1994年までは，当時の大学生も大学の「分配」によって，中央の政府機関や国有企業に就職することができた。しかしながら，1980年代以降，「固定工」制度に代わって，一部の企業が「契約工」制度を導入し始めた。そして，1994年の「労働法」の公布に伴って，労使双方が雇用契約書に基づく「契約工」制度が全面的に導入されることになった。

一方，以前は大学生になること自体，エリートとみなされていたが，1998年の制度改革（大学入学定員の増加）以降，大学生数および卒業生数は増加に転じ，それに伴って，大学生へのエリート観も弱まると同時に，大学生の就職不安が社会問題化してきている。「契約工」制度は大学生たちに職業選択の自由を保証する反面，大学生の雇用不安定，フリーター化や失業といったリスクももたらしている。

そのような状況の下で，大学生はどのように，また何に依存し就職活動を行っているのであろうか。これまでの研究では，市場経済化が進むと，個々の人間関係を通じた社会的ネットワークの役割が拡大するとみられており，特に就職，転職，そして事業のスムーズな進展には必要な要素となっている（Wank, 1999）。

本稿では，復旦大学と蘇州大学でのアンケート調査を通じて，彼らの就業活動時における社会

的ネットワークの役割とその考え方の違いについて考察した。第1節では先行の文献と分析の方法を紹介し，第2節では，労働力市場や大学生数の状況などを概観し，第3節と第4節ではアンケート調査とクロス集計表の分析結果を提示し，最後に結論を述べる。

第1節　先行研究と研究方法

1. 先行研究

(1) 社会的ネットワークと社会関係資本

社会関係資本に関して，1980年代以降，経営学，社会学の分野で注目され始めたが，それは，社会的ネットワークの中に埋め込まれた資源と定義されている。またその機能について，① 情報流量を促す効果，② 雇用や昇進を決定する際に重要な役割を担う人や組織に影響をもたらす効果，③ 個人の信用保証としての効果，④ アイデンティティや承認を強化する効果などがあり，それらが強弱に関連することで社会集団に何らかの利益をもたらしていたり，個人に同様の利益をもたらしているとみられている（リン，2008)。

そのうち後者（個人）について，グラノベッターは社会関係資本が個人的な利益，——たとえば就職や転職にあたって，その機会や収入の向上がもたらされるとし，そこでは“強い紐帯(Strength Ties)”よりも“弱い紐帯（Weak Ties)”が重要な役割を果たすと述べている(Granovetter, 1973；1995)。ところが，グラノベッターのこの概念は，具体性に欠ける部分を備えていたために，どのような弱さの程度であればよいのか，またどのようなレベルの対人関係に有用なのかが明らかではなかった。このような欠点を補い，社会関係資本と就業獲得との関係を明らかにしたのが，リンである。リンによれば，自分を起点とした個人の持つ社会関係のなかに，多様な資源（＝他者）があればあるほど，またそれらが多ければ多いほど，就職や転職にあたって，有利に働くとしている。その際，特に重要なのが，強い紐帯間では得られないような異質な情報とその多さであるとも述べている（リン，前掲書)。つまり，職業の転換，新ビジネスの展開などの機運に直面したとしても，それを成功裏に成し遂げるためには，同質な情報を活用するよりも，異質な情報を獲得できるような，押しと引きが伴う対人関係が有用だということである。

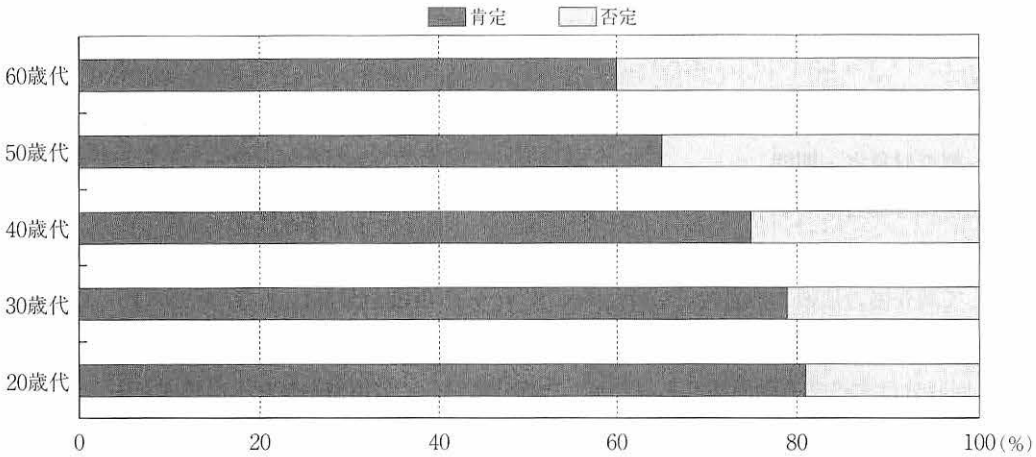
(2) 中国での社会的ネットワークと大学生の就業について

これまで中国人の社会的ネットワークの活用について，多くの関心が寄せられ，またそれに関する研究が多数行われてきている。たとえば図1は，「仕事を探す際にパーソナルな関係を利用することは必ずしも悪いことではない」とする文言に対する評価を質問した結果を年代別に表したものである（菱田・園田，2005)。この結果を受けて，菱田らは，改革開放以降の市場経済化のなかで，ひとびとはコネを使うことに寛容になったが，それは若い世代ほど顕著だとしている。

このことは，1978年以前には否定されていた人間関係や贈答社会が復活してきているとみるべきであろうか。中国社会科学院と香港科技大学との共同研究によれば，1995年以前と以後におい

て，失業者が再就職する際に，社会的ネットワークと人的資本のどちらが有効かを統計的に考察している。結果として，1995年以前において，社会的ネットワークの利用は集団企業などの再就職に有意であったが，1995年以降は，有意な結果は得られなかった。また教育年数などの人的資本の利用は私営，個体，集団所有制企業に比べて，国有企業などの単位への再就職に有意であったが，1995年以降はその程度が高まったとしている。ここから，労働力市場がなお未成熟ななかでありながらも，再就職過程において，社会的ネットワークよりも人的資本のほうが重要になってきていると主張している（趙，2002）。

図1　「仕事を探す際にパーソナルな関係を利用することは必ずしも悪いことではない」とする文言に対する評価



出所：菱田，園田［2005］109頁より。
注：左側が肯定，右側が否定的な意見を示している。

それでは，大学生の就職時において，社会的ネットワークはどのような働きをするのであろうか。たとえば，鄭は家庭の所得水準などの多少は大学生の就職にも大きく影響し，無視し得ないとみている。また社会的ネットワークが大学生の就職に重要な役割を果たしている原因として，① 社会的ネットワークは労働力市場における情報の非対称性を補完し，また求職者に非正式な求職ルートを提供し，ここから市場と政府以外の労働力資源の配置の役割を担っている。② 中国伝統社会は人間関係と権力関係を重視し，家柄は代々継続し，大学生の就職活動もこれに大きく影響される。③ 移行期中国の労働力市場は不完全であることから，社会的ネットワークがその不完全性を補完する働きをしていると述べている（鄭，2004）。

また楊らは，重慶の4つの大学（重慶大学，西南大学，重慶工学院，重慶電子科技大学）での調査から，次のような結果を導いている。第一に大学生が社会的ネットワークを活用するなかで最も多いのは父母の支援であったこと。② 大学生が就職活動を行う中で，父母が資金や物質的支援を行うのが最も多く，次に心理的な支援が多かった。親戚については，心理的な支援が最も多く，次に就職情報が多かった。友人については，就職情報が最も多く，次に心理的な支援が多かったこと。③ 大学生がこれらの支援を求める際，彼らは積極的にこれら対人関係に依存し，

その後，気持ちや物質的なもので感謝の意を表していることなどである（楊・玉，2008）。

以上のように，中国では，学歴や職能重視という価値観が浸透しているとはいえ，社会的ネットワークの役割もそれ以上に重視されており，特に大学生が就職活動をする際に，理想的な仕事をみつけるためにも，それが重要であることが調査・研究などを通じて明らかにされている[1)]。ところが，中国では現在に至っても「戸籍制度」が存在し，また地方分権化の徹底により労働市場が地域ごとに分断されていることが明らかにされている（丸川，2002）。つまり，これら労働市場の分断のために，地域によって，社会的ネットワークの役割やその内容が異なるのではないだろうか。

本稿では，上海市（復旦大学）と蘇州市（蘇州大学）で行った，アンケート調査の結果を通じて，大学生が就職活動時における社会的ネットワークの役割とその考え方の違いを明らかにしたい。

2. 研究方法

(1) 調査対象者・期間

2008年12月20日から24日の5日間に，復旦大学の3年生168人と蘇州大学の4年生（大学院生も含む）98人に対して，書面によるアンケート調査を実施した。具体的には，授業終了後に学生に対して調査協力依頼を担当教員が行ない，アンケート用紙を配布した。なおアンケートの質問内容の翻訳と用紙の配布・回収に際して，復旦大学日本研究センターと蘇州大学学生の協力を得た[2)]。回収分はすべて有効回答であったが，一部分において欠損値や無記入な箇所があった。

(2) 調査項目・方法

アンケートの質問内容は，1．基本属性として，① 性別，② 出身地，③ 年齢，④ 学年，⑤ 専門を質問した。また2．質問項目として，次のことを質問した。1)「就職活動はしていますか」（はい・いいえ），2)「どんな分野の会社に就職したいですか」（国有，私営，外資，公務員，その他），3)「希望所得はいくらですか」（1000元未満，3000元未満，5000元未満，5000元以上），4)「就職でコネを使うことはよいと思いますか」（当然だ，使うべきではない），5)「社会的上昇を行うための条件とは以下のうちどれだと思いますか」（① 理想 ② 自分 ③ 他人について，才能，人間関係，運，権勢，お金，わからない），6)「中国社会全般について伺います。中国は「関係重視社会」だという意見がありますが，それに対してあなたはどのように考えますか」（全く同感，まあ同感，あまり同感ではない，全く同感ではない，わからない），7)「「全く同感」「まあ同感」と答えた方に伺います。では，その「関係重視社会に対してあなたはどう考えます

1) 一方，胡によれば，社会関係資本が大学生の就職活動に影響する程度は限定的とみている。理由として，第一に労働力市場が計画経済から市場経済への特徴に変化したことから，社会関係資本の役割はなくなったこと。第二に社会的ネットワークの利用によって，労働力市場の効率性が高まると一般的にはみられているが，中国では労働供給過剰であることから，その利用の余地は少ないこと。第三に情報社会の到来（ネット市場など）によって，社会的ネットワークの利用が不必要になり，また大学生の条件は一般より恵まれているために，その利用は限定的であるとしている（胡ほか，2008）。

2) 復旦大学では日本研究センターの賀平氏，蘇州大学では主に日本語学科の学生の協力を得た。

か」」（全くよい，まあよい，あまりよくない，全くよくない，わからない），8)「「全く同感」「まあ同感」と答えた方に伺います。では，その「関係重視社会」はこれからも続くと思いますか」（絶対続く，まあ続くだろう，続かないだろう，全く続かないだろう，わからない），9)「「関係」が特に必要な場面はいつですか」（受験，就職，ビジネス，昇進，地域移動，特にない，わからない，その他），10)「将来，あなたが要職についており，能力はないが昔からの友人があなたのところにきて職を求めてきたとします。このような場合，どうすべきであると考えますか」（絶対に与えるべき，できれば与えるべき，どちらともいえない，できれば職を与えないほうがよい，絶対に与えるべきではない）などであった。

基本属性および社会的ネットワークの利用に対する考え方について，まず記述的統計表を用いて整理し，そののち，性別，出身別，希望職種別（国有企業や外資系企業など）と社会的ネットワーク利用に対する意識の違いがあるのかをクロス集計表を使って考察した。またクロス集計結果にカイ二乗（χ^2）検定（chi-square-test）を行い，性別などと社会的ネットワークの利用に差がみられるのかを統計的に考察した。

第2節　大学生の就職事情

1. 大学生の就職事情

1949年以降，中国では計画経済体制の下で，大学生の就職は高度に保障され，如何なる問題も存在しなかった。政府は指令性の計画指標（労働力指標，給与指標，幹部指標など）を発令し，大学生の「分配」を実施した。大学生および中等専門学校生は入学と同時に“国家幹部”の身分を保証され，卒業すると同時に，就職が決まった。この時期，大学生は“国家の人”とみなされ，政府も100％の確率で仕事を保証したことから，根本的に就職・雇用不安の問題は存在しなかった。

1980年代から1990年代に至って，経済の高度成長が実現し，基本的に大学生に対する需要が増加したが，一方では，大学生に対する供給（入学者）も安定的に増加したことから，これら需要と供給面でのアンバランスは起こらなかった。その後，1990年代中期以降になっても，経済体制改革と労働人事制度改革の下で，基本的に“計画分配労働（固定工）”から“双向選択，市場就業（契約工）”への転換が行われたが，大学生の就職事情に大きな変化はなかった。

しかしながら，1999年以降，中国政府は経済発展を支える人材の供給，持続的な消費（特に内需）の増加，大学進学率の向上を目指し，高等教育機関の学生募集数を増加させ，その結果，大学卒業生数も増加し始めた。

たとえば，表1は大学生の就職状況（2000～2007年）を示したものである。2000～2001年までの卒業生数はゆるやかな増加にとどまったが，2002年の卒業生数は145万人になり，前年比28万人の増加（23.9％増加）となった。この時期から，少しずつ卒業生数が増加し始める（就職人数も増加）一方で，未就職数も増加し始めていることがわかる。このことに政府も関心を寄せ，

2002年3月，国務院「関於進一歩深化普通高等学校卒業生就業制度改革有関問題的意見」を公布した。またこの問題は，構造的なものであるとの認識から，各省，自治区，直轄市，国務院各部門にも関連の意見を出し，早期解決を促した（姚，2008)。

表1 大学生の就職状況の変化

	卒業生数	増加数	増加率（%）	就職人数	就職率（%）	未就職数
2000	107	—	—	77.0	72.0	—
01	117	10	9.3	80.5	70.0	4.5
02	145	28	23.9	108.1	74.6	2.4
03	212	67	46.2	148.4	70.0	63.6
04	280	68	32.1	204.4	73.0	75.6
05	338	58	20.7	245.4	72.6	92.6
06	413	75	22.2	299.8	72.6	113.2
07	495	82	19.9	358.9	72.5	136.1

出所：姚，2008より作成。
注：単位は万人で示している。

2003年夏期になると，1999年入学の大学生が一斉に卒業を迎え，また卒業生数も2002年に比べて67万人増加し，212万人（46.2%増加）に達した。これらのことは，労働市場における需要と供給の問題を顕在化させることになり，約60万人あまりの大学生の失業問題としてあらわれた。大学生の就職不安は，構造的な問題だけではなく，需要側の問題であることも認識されるようになった。これを受けて，2003年5月29日，国務院「関於做好2003年普通高等学校卒業生就業工作通知」を公布し，各省・市および各部局が十分に大学生の就職工作の重要性と緊迫性を認識した上で，社会各方面の協力を呼びかけ，2003年の卒業生就職工作を成し遂げることを要求した。

2004年以降も卒業生は増加し，2007年の卒業生は2003年と比べて，2倍以上の495万人に達した。各方面の就職支援活動や努力にもかかわらず，就職率は70%台前半にとどまり，未就業数も100万人を突破した。大学卒業生の就職不安の問題は一層深刻になり，打開策が見つからない状態が続いている。

2. 就職不安の背景

改革開放以降，中国はおおよそ10%前後の経済成長率を実現し，かつGDPも日本を抜き，世界第二位になろうとしているが，計画経済と市場経済が混在する過渡的時期にあるため，経済構造の調整局面にある。

所有構造の点から言えば，非公有経済部門の目覚ましい発展があり，それとともに多くの雇用を創出してきた。最近になって，政府は経済成長の持続と雇用の拡大を促すために，非公有経済の発展——特に地域社会や多様な就業を促す措置を講じはじめた。ただ，相対的にみれば，国有企業や国家機関などの公有部門はなお大学卒業生の有力な就職先の一つであることから，これらの単位に対する経営効率化や組織改革を行い，競争メカニズムの導入や利益インセンティブの強化をすすめている。ささやかながら，これらの措置を通じて，国有企業の競争力強化と雇用創出

が実現している。

地区の点から言えば，沿海地域は，これまで多くの労働力を吸収してきたが，それに対して，内陸地域は「西部大開発」などの政策が実施されているものの，雇用創出，給与水準，生活水準などの面では劣勢におかれている。2004年第4四半期の労働市場では，求人数は347.4万人に対して，求職者数は369.1万人で，求人倍率は0.94の高水準を維持している。また地区別では，華東地区は1.09，西南地区は0.98，中南地区は0.84，西北地区は0.81，東北地区は0.77となり，経済発展の状況と相関している（小松，2007)[3]。

ところで，労働力の供給側の要因として，2000年以降，大学などの卒業生の増加を挙げることができる。上記でも紹介したように，1998年以降，大学募集定員が拡大され，それによって，全国の大学レベルの卒業生は2000年の107万人から2007年の495万人へと，4倍以上増加した。同時に，未就業者は2001年の4.5万人から2007年の136万人へと100万人の大台を突破した[4]。

一方，需要側の要因として，第一に中国では第一次，第二次産業中心の就業構造であったために，大学生の就業先とみられる第三次産業の需要が発展途上であったことである[5]。たとえば，日本の2008年の第三次産業の就業人口比率が62.7％であるのに対して，中国のそれは半分の32.4％（2007年）にすぎない。第二に企業は一般的に即戦力を必要としているために，大学新卒者の採用を控える傾向にあることである。改革開放以前は，「固定工」制度の下で，企業に入れば，そこで教育を受け，企業が必要とする人材へと育っていったが，現在は，市場経済の進展に伴って，経営の効率化，競争力の強化が求められるようになった。そのために，専門分野での経験者か技術をもった人材の採用が優先されている。第三に労働力市場の分断を挙げることができる。1958年以降，中国では「戸籍制度」が実施され，例外はあるものの，現在においても継続中である。それが意味することは，農民の都市への移動が制限されていることである。また省や直轄市（労働管理部門）ごとに，外地人（地元以外の人）の雇用を制限する規制や法律があることである。

以上のことから，現状では，大学卒業生の労働力市場での需給ギャップ（供給超過と特殊な需要構造の共存）が顕著になっているといえよう。第3節では，アンケート調査を通じて，現在の大学生が就職活動中の社会的ネットワークの利用についての考え方を考察してみよう。

第3節　アンケート調査，クロス集計表

1. 基本属性

復旦大学の調査対象者（3年生）は168人で，そのうち男性は62人，女性は106人で，それぞれ

3)　全体的には平均70％前後の就職率で推移しているが，地区別には，売り手市場のところもあれば，買い手市場のところもあるようである。

4)　未就職者のなかには，大学院進学を目指すものや落第して大学に滞留する者も含まれている（莫主編，2004)。

5)　これまでも大学生の多くがサービス部門や組織，国家機関部門に就職していることが明らかにされている（孫・謝，2008)。

36.9%，63.1%を占めている。出身地について，上海市が79人で最も多く，江蘇省が８人，河南省が６人，浙江省が６人，広東省が６人，新疆ウイグル自治区が６人，その他が７人になっている。復旦大学は上海市にあることから上海市やその周辺地域の江蘇省や浙江省からの出身者が多いことがわかる。専攻について，政治・行政管理系の学部が37人，理工系の学部が28人，統計学系の学部が27人，経営系の学部が26人，社会学系の学部が15人，外国語・中国文学系の学部が12人になっている。

次に，蘇州大学の調査対象者（３年生：３人，４年生：73人，大学院３年生：20人，不明：２人）は98人で，そのうち男性は35人，女性は63人で，それぞれ35.7%，64.3%を占めている。出身地について，蘇州市に大学があることから，江蘇省が81人で最も多く，その他が17人になっている。その他には，山東省，福建省，広東省出身者などが含まれている。専攻について，日本語系の学部が46人で最も多く，紡績系の学部が20人，中国文学系の学部が12人，環境系の学部が７人になっている。

2. アンケート質問についての回答

まず「どのような分野の会社に就職したいですか」との質問について，復旦大学においては，外資系企業が94人で最も多く，公務員が42人，国有企業が24人，私営企業が17人になっている。蘇州大学においても，外資系企業が56人で最も多く，公務員が21人，国有企業が18人，私営企業が11人になっている（表２）。

表２　どのような分野の会社に就職したいですか

	合　計	国　有	私　営	外　資	公務員	その他
復旦大学	188	24	17	94	42	11
割合(%)	100.0	12.7	9.0	50.0	22.3	5.9
蘇州大学	115	18	11	56	21	9
割合(%)	100.0	15.6	9.5	48.7	18.3	7.8

注：複数回答があるために合計数は調査対象者数を上回っている。

割合でみると，両大学ともに外資系企業への就職希望が最も多いが，公務員や国有企業への人気も高いことがわかる[6)]。前者（外資系）への就職理由として，「自分の能力を試すことができる」「自由な雰囲気がある」「待遇がよく，将来性がある」といったものが多く，後者（国有・公務員）については，「収入が安定していて，プレッシャーが少ない」「専門に合っている」「女性にとって働きやすい」などが多くなっている。就職希望地について，復旦大学においては，上海市が125人で最も多く，その他は47人になっている。蘇州大学においては，蘇州市が63人で最も多く，その他は43人になっている。

「希望所得はいくらですか」との質問について，復旦大学においては，5,000元以上が98人で

6) 都市の外資系ホワートカラーと国有系ホワイトカラーの場合も他の階層に比べて高学歴であることが明らかにされている（菱田・園田，前掲書，168頁）。

表3　希望所得はいくらですか

	合　計	～1,000	～3,000	～5,000	5,000以上
復旦大学	166	0	3	65	98
割合（%）	100.0	0.0	1.8	39.1	59.0
蘇州大学	98	1	31	45	21
割合（%）	100.0	1.0	31.6	45.9	21.4

注：複数回答があるために合計数は調査対象者数を上回っている。単位は人民元である。

最も多く，5,000元までが65人，3,000元までが3人になっている。蘇州大学においては，5,000元までが45人で最も多く，5,000元以上が21人，3,000元までが31人，1,000元までが1人になっている（表3）[7]。

「これらについて，復旦大学のある上海市には，蘇州市に比べて，多くの外資系企業や国有企業がある（経済発展水準が高い）ことと，もう一つは，復旦大学は3年生の回答で，理想的な金額をあげていることから，その要求水準も高くなっているのではと思われる[8]。就職で個人的関係を使うことに対してあなたはどう思いますか」との質問について，復旦大学においては，「当然だ」が134人，「使うべきではない」が28人であり，それぞれ82.7%，17.3%を占めている。蘇州大学においては，「当然だ」が72人，「使うべきではない」が21人で，それぞれ77.4%，22.6%を占めている。蘇州大学のほうが若干関係利用については否定的である（表4）。「当然だ」と答えた理由として，「関係重視社会には幾分問題はあるが，これは私たちの文化の一部分だから」「関係も一つの才能だから」「郷に入れば郷に従えだから」がみられ，「使うべきではない」と答えた理由として，「公平であるべきだから」「公平な競争を損なうから」「裕福は三代，貧乏も三代だから」などがみられる。

表4　就職で個人的関係を使うことに対してあなたはどう思いますか

	合　計	当　然　だ	使うべきではない
復旦大学	162	134	28
割合（%）	100.0	82.7	17.3
蘇州大学	93	72	21
割合（%）	100.0	77.4	22.6

注：未回答があるために合計数は調査対象者数を下回っている。

「社会的上昇を行うための条件とは以下のうちどれだと思いますか」との質問について，復旦大学においては，① 理想の条件をみると，「才能」を選んだ学生が156人で最も多く，続いて「関係」が121人，「運」が86人で続いている。② 自分も同じく「才能」「関係」「運」の順に多くなっているが（「わからない」が多いのは，3年生だからだと思われる），③ 他人の条件をみると，「関係」が105人，「才能」が78人，「権力」が73人，「運」が63人，「お金」が62人になってお

7)　一般的に，上海，蘇州，無錫，南通，常州，南京と長江を上流に行くにつれて賃金が下がっていく傾向にある（丸川，2002，125頁）。

8)　復旦大学4年生（就職活動中）の回答からは「～5,000元」を選ぶものも多く見られた。

り，理想や自分に比べて，意識が分散している。

蘇州大学においては，① 理想の条件をみると，「才能」を選んだ学生が最も多く，続いて「関係」「運」が多くなっている。② 自分も同様の傾向にあるが，③ 他人の条件をみると，復旦大学と同様に回答が分散している（表5）。

表5 社会的上昇を行うための条件とは以下のうちどれだと思いますか

		合 計	才 能	関 係	運	権 力	お 金	わからない	その他
復旦大学	①理 想	472	156	121	86	55	49	4	1
	割合(%)	100.0	33.1	25.6	18.2	11.7	10.4	0.8	0.2
	②自 分	318	98	74	73	14	12	46	1
	割合(%)	100.0	30.8	23.3	23.0	4.4	3.8	14.5	0.3
	③他 人	423	78	105	63	73	62	41	1
	割合(%)	100.0	18.4	24.8	14.9	17.3	14.7	9.7	0.2
蘇州大学	①理 想	281	83	73	61	33	28	0	3
	割合(%)	100.0	29.5	26.0	21.7	11.7	10.0	0.0	1.1
	②自 分	198	87	52	32	9	10	7	1
	割合(%)	100.0	43.9	26.2	16.2	4.5	5.1	3.5	0.5
	③他 人	260	69	65	42	44	34	4	2
	割合(%)	100.0	26.5	25.0	16.2	16.9	13.1	1.5	0.7

注：複数回答があるために合計数は調査対象者数を上回っている。

「関係」「才能」などを選んだ理由として，「仕事には人脈が必要だから」「就職は難しくなり，みんな関係を利用しているので」「競争が激しいので」などの意識がある一方で，両大学ともに，自分には才能や関係を利用すると意識する一方で，他人（現実）には，権力やお金を利用するとみているようである[9)]。

社会心理研究所が行った調査からも「現在の社会ではどのような人が有利ですか」との質問について，ほとんどの人が「お金のある人」「権力を持つ人」と答えている（馮，1995）。

以上のことから，図1にもあったように，彼らは積極的に個人的な関係を使うことを肯定しているわけではないが，就職，生活には必要なものとしてとらえていると言えよう。

「中国社会全般について伺います。中国は「関係重視社会」だという意見がありますが，それに対してあなたはどのように考えますか」との質問に対して，復旦大学においては，「まあ同感」が82人で最も多く，「全く同感」が69人で次いで多くなっている。蘇州大学においては，「全く同感」が47人で最も多く，「まあ同感」が44人で続いている（表6）。

これらについて，両大学の学生とも同じ傾向にあることがわかる。

「表6で「全く同感」「まあ同感」と答えた方に伺います。では，その「関係重視社会」に対してあなたはどう考えますか」との質問について，復旦大学においては，「まあよい」が94人で最も多く，「あまりよくない」が38人で次いで多くなっている。蘇州大学においては，「まあよ

9) また父母や親戚などの社会関係資本を通じた事例がたびたび紹介されている（楊・王，前掲書，および阮，1990）。

表6　中国社会全般について伺います。中国は「関係重視社会」だという意見がありますが，それに対してあなたはどのように考えますか

	合　計	全く同感	まあ同感	あまり同感ではない	全く同感ではない	わからない
復旦大学	163	69	82	9	2	1
割合(%)	100.0	42.3	50.3	5.5	1.2	0.6
蘇州大学	98	47	44	6	1	0
割合(%)	100.0	47.9	44.9	6.1	1.0	0.0

注：表4に同じ。

い」が51人で最も多く，次いで「全くよい」が25人で次いで多くなっている（表7）。

これについて，蘇州大学の学生のほうが「関係重視社会」を肯定的にとらえていることがわかるが，その理由として，蘇州大学の学生は4年生や大学院性が多いことと，すでに就職活動をしていることから，現実の社会を直視した結果だと推測できよう。

表7　「全く同感」「まあ同感」と答えた方に伺います。では，その「関係重視社会」に対してあなたはどう考えますか

	合　計	全くよい	まあよい	あまりよくない	全くよくない	わからない
復旦大学	163	5	94	38	10	6
割合(%)	100.0	3.1	57.6	23.3	6.1	3.7
蘇州大学	91	25	51	14	1	0
割合(%)	100.0	27.5	56.0	15.4	1.1	0.0

注：表4に同じ。

「表6で「全く同感」「まあ同感」と答えた方に伺います。では，この「関係重視社会」はこれからも続くと思いますか」との質問について，復旦大学においては，「絶対続く」が99人で最も多く，「まあ続くだろう」が42人で次いで多くなっている。蘇州大学においても，「絶対続く」が53人で最も多く，「まあ続くだろう」が33人で次いで多くなっている（表8）。継続する理由として，「人間関係は仕事や生活の面で必要不可欠であるから」「中国の国情にあっているから」「人間関係は個人，家庭先祖代々受け継がれてきたものであるので，急にはかわらないから」がみられる。一方，継続しない理由として，特に記述はみられなかった。

表8　「全く同感」「まあ同感」と答えた方に伺います。では，この「関係重視社会」はこれからも続くと思いますか

	合　計	絶対続く	まあ続くだろう	続かないだろう	全く続かないだろう	わからない
復旦大学	149	99	42	6	0	2
割合(%)	100.0	66.4	28.2	4.0	0.0	1.3
蘇州大学	89	53	33	0	2	1
割合(%)	100.0	59.5	37.1	0.0	2.2	1.1

注：表4に同じ。

「ここからは，皆さんに伺います。「関係」が特に必要な場面はいつですか。またその理由は

何ですか」との質問について，復旦大学においては，「ビジネス」が128人で最も多く，「就職」が89人で次いで多くなっている。

蘇州大学においては，「就職」が65人で最も多く，「ビジネス」が64人で次いで多くなっている。また「地域移動」も62人で3番目に多くなっている（表9）。これは戸籍制度が存在し，労働市場の分断が存在する現状では，蘇州市よりも上海市や北京市などの就業機会が多い地域への移動に関心が集まっていると思われる。

表9 「関係」が特に必要な場面はいつですか

	合 計	受 験	就 職	ビジネス	昇 進	地域移動	特にない	わからない	その他
復旦大学	361	5	89	128	69	59	2	8	1
割 合（%）	100.0	1.4	24.6	35.4	19.1	16.3	0.5	2.2	0.3
蘇州大学	218	4	65	64	21	62	0	0	2
割 合（%）	100.0	1.8	29.8	29.3	9.6	28.4	0.0	0.0	0.9

注：表5に同じ。

「将来，あなたが要職についており，能力はないが昔からの友人があなたのところにきて職を求めてきたとします。このような場合，どうすべきであると考えますか」との質問については，復旦大学においては，「できれば与えるべき」が74人で最も多く，「どちらともいえない」が48人で次いで多くなっている。

蘇州大学においては，「できれば職を与えないほうがよい」が38人で最も多く，「できれば与えるべき」が30人で次いで多くなっている（表10）[10]。

表10 将来，あなたが要職についており，能力がないが昔ながらの友人があなたのところにきて職を求めてきたとします。このような場合，どうすべきであると考えますか

	合 計	絶対に与えるべき	できれば与えるべき	どちらともいえない	できれば職を与えないほうがよい	絶対に与えるべきではない
復旦大学	163	3	74	48	26	11
割合(%)	100.0	1.8	45.4	29.4	15.9	6.7
蘇州大学	98	1	30	10	38	19
割合(%)	100.0	1.0	30.6	10.2	38.7	19.4

注：表4に同じ。

「絶対に与えるべき」，「できれば与えるべき」の理由として，「友人だから」「彼に合った仕事をあげればよいから」「能力は訓練次第でよくなるから」があり，「どちらともいえない」の理由として，「会社の利益を考えると，採用しないほうがよいから」「関係の問題は利点欠点があるから」があり，「できれば職を与えないほうがよい」「絶対に与えるべきではない」の理由として，「能力のない人は会社に面倒なことだけをもたらすから」「能力が基礎であるから」などがみられる。

10) 蘇州の日系企業で行った同種の質問からも「できれば職を与えない方がよい」「絶対に与えるべきではない」との回答が多数を占めていた（2008年12月22日調査）。

1987年に日本と中国の大学生100名を対象にした意識調査のなかで，中国人の約8割が「あたえるべき」だと答えており，この結果について，園田は「中国人の方が相対的に関係を重視する傾向が強い」とみている[11]。ただ，中国人の中でも，復旦大学の卒業生には社会的ネットワーク（復旦大学には共産党青年団組織があり，そうした組織の有無が就職活動に影響するとみられている）が形成されていることから，関係を肯定的に捉えている者が多く，蘇州大学はそれがやや弱いことから，関係を否定的に捉えている者が多くなっているものと考えられよう。

第4節　クロス集計表より

1. クロス集計表より

(1) 性別と就職で関係を使うことについて（表11-1，表11-2）

本節では，ある質問に対して，異なった集団（男性，女性など）の反応が同じであるか否かを統計的に判断する。

「就職で個人的関係を使うことに対してあなたはどう思いますか」という質問に関して，復旦大学において，男性のうち「当然だ」と答えた学生は44人（72.1%）であったが，「使うべきではない」と答えた学生は17人（27.9%）であった。女性のうち「当然だ」と答えた学生は88人（83.0%）であったが，「使うべきではない」と答えた学生は18人（17.0%）であった。検定の結果，男性に比べて，女性の方が関係を利用することを肯定的に考えていると言えよう。

この結果について，男性は自分の能力に自信をもち，女性は関係を中心に就職活動を考えるという特性が示されていると思われる[12]。

表11-1　性別と就職で関係を使うことについて（復旦大学）

			当　然　だ	使うべきでない	合　　計
性　別	男　性	度数	44	17	61
		性別の%	72.1	27.9	100.0
		Q10の%	33.3	48.6	36.5
		総和の%	26.3	10.2	36.5
	女　性	度数	88	18	106
		性別の%	83.0	17.0	100.0
		Q10の%	66.7	51.4	63.5
		総和の%	52.7	10.8	63.5
合　　計		度数	132	35	167
		性別の%	79.0	21.0	100.0
		Q10の%	100.0	100.0	100.0
		総和の%	79.0	21.0	100.0

11) 園田茂人「『関係主義』社会としての中国」辻ほか編［1991］43頁。

12) 一般的には，女子学生の方が男子学生に比べて，就職が決まるのが遅く，同じ条件だと男性の方を採用する傾向にあるという（人民中国，2008年5月，23頁）。

表11-2 カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearson のカイ2乗	2.771a	1	.096
連続修正	2.152	1	.142
尤度比	2.703	1	.100
Fishesr の直接法			
線型と線型による関連	2.754	1	.097
有効なケースの数	167		

a. 0セル (.0%) は期待度数が5未満です。最初期待度数は12.78です。
b. 2x2表に対してのみ計算。

(2) 性別と関係重視社会に同感か同感でないかについて (表12-1, 表12-2)

「中国は関係重視社会ですが, これについてどうお考えですか」という質問に関して, 復旦大学において, 男性のうち「同感である」が52人 (85.2%),「同感でない」が9人 (14.8%) であったが, 女性のうち「同感である」が99人 (93.4%),「同感でない」が7人 (6.6%) であった。検定の結果, 女性のほうが男性に比べて, 関係重視社会について, 肯定していることがわかった。この結果についても, 1)と同じ解釈が可能であろう。

表12-1 性別と関係重視社会に同感か同感でないかについて (復旦大学)

			同感である	同感でない	合計
性別	男性	度数	52	9	61
		性別の%	85.2	14.8	100.0
		Q11の%	34.4	56.2	36.5
		総和の%	31.1	5.4	36.5
	女性	度数	99	7	106
		性別の%	93.4	6.6	100.0
		Q11の%	65.6	43.8	63.5
		総和の%	59.3	4.2	63.5
合計		度数	151	16	167
		性別の%	90.4	9.6	100.0
		Q11の%	100.0	100.0	100.0
		総和の%	90.4	9.6	100.0

注：同感であるには「全く同感」「まあ同感」を含み, 同感でないには「あまり同感でない」「全く同感はない」「わからない」を含んでいる。

表12-2 カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearson のカイ2乗	2.969a	1	.085
連続修正	2.103	1	.147
尤度比	2.849	1	.091
Fishesr の直接法			
線型と線型による関連	2.951	1	.086
有効なケースの数	167		

a. 0セル (.0%) は期待度数が5未満です。最初期待度数は5.84です。
b. 2x2表に対してのみ計算。

(3) 出身と就職で関係を使うことについて（表13-1，表13-2）

表13-1　出身と就職で関係を使うことについて（復旦大学）

			当　然　だ	使うべきでない	合　計
出　身	上　海	度数	75	4	79
		出身の%	94.9	5.1	100.0
		Q12の%	49.7	25.0	47.3
		総和の%	44.9	2.4	47.3
	上海以外	度数	76	12	88
		出身の%	86.4	13.6	100.0
		Q12の%	50.3	75.0	52.7
		総和の%	45.5	7.2	52.7
合　計		度数	151	16	167
		出身の%	90.4	9.6	100.0
		Q12の%	100.0	100.0	100.0
		総和の%	90.4	9.6	100.0

表13-2　カイ2乗検定

	値	自　由　度	漸近有意確率（両側）
Pearson のカイ2乗	3.532a	1	.060
連　続　修　正	2.612	1	.106
尤　度　比	3.707	1	.054
Fishesr の直接法			
線型と線型による関連	3.511	1	.061
有効なケースの数	167		

a. 0セル（.0%）は期待度数が5未満です。最初期待度数は7.57です。
b. 2x2表に対してのみ計算。

「就職で個人的関係を使うことに対してあなたはどう思いますか」という質問に関して，復旦大学において，上海出身者のうち「当然だ」と答えた学生は75人（94.9%），「使うべきでない」と答えた学生は4人（5.1%）であった。上海以外の出身者のうち「当然だ」と答えた学生は76人（86.4%），「使うべきでない」と答えた学生は12人（13.6%）であった。

(4) 出身と関係重視社会はこれからも継続するかについて（表14-1，表14-2）

表14-1　出身と関係重視社会はこれからも継続するかについて（復旦大学）

			継 続 す る	継続しない	合　計
出　身	上　海	度数	74	5	79
		出身の%	93.7	6.3	100.0
		Q13の%	52.5	19.2	47.3
		総和の%	44.3	3.0	47.3
	上海以外	度数	67	21	88
		出身の%	76.1	23.9	100.0
		Q13の%	47.5	80.8	52.7
		総和の%	40.1	12.6	52.7
合　計		度数	141	26	167
		出身の%	84.4	15.6	100.0
		Q13の%	100.0	100.0	100.0
		総和の%	84.4	15.6	100.0

注：継続するには「絶対続く」「まあ続くだろう」を含み，継続しないには「続かないだろう」「全く続かないだろう」「わからない」を含んでいる。

表14-2 カイ2乗検定

	値	自 由 度	漸近有意確率（両側）
Pearson のカイ2乗	9.737a	1	.002
連 続 修 正	8.449	1	.004
尤 度 比	10.449	1	.001
Fishesr の直接法			
線型と線型による関連	9.679	1	.002
有効なケースの数	167		

a. 0セル（.0%）は期待度数が5未満です。最初期待度数は12.30です。
b. 2x2表に対してのみ計算。

検定の結果，上海出身者のほうが関係を利用することを肯定的にとらえていると言える。この結果について，上海出身者は上海語で交流できる身内を重視する考え方を示していると思われる。

「関係重視社会が将来的に継続するか」という質問に関して，復旦大学において，上海出身者のうち「継続する」と答えた学生が74人（93.7%），「継続しない」と答えた学生が5人（6.3%）であった。上海以外の出身者のうち「継続する」と答えた学生は67人（76.1%），「継続しない」と答えた学生は21人（23.9%）であった。検定の結果，上海出身者のほうが，関係重視社会が今後も継続すると考えていると言えよう。

2. 考 察（まとめ）

以上のように，クロス集計表を通じた考察からは，蘇州大学については有意な結果は得られなかったが，復旦大学についてはいくつか有意な結果が得られた。

第一に，就職で関係を使うことに対して，女性の方が「当然だ」と思っていることが明らかになった。これまでも需要側の都合から，女子学生は男子学生より就職が不利であることが指摘（たとえば，高等教育規模拡大と労働力市場—課題組の調査——2003年6月に中国・7省市の16,000人の高校卒業生を対象に実施——によると，男子学生は女子学生に比べて，社会的ネットワークよりも人的資本を利用する頻度が高いとしている）されてきたが，そうした不利性を克服する一つの手段として，女子学生が関係を積極的に活用すべきだと考えているものと思われる（楊・玉，前掲書）。

第二に，就職で関係を使うことに対して，上海出身者の方が「当然だ」と思っていることが明らかになった。この要因について，復旦大学の上海出身者は上海以外の出身者と比べて，就職支援ネットワーク（学生が共産党青年団に入っていたり，上海に戸籍をもっていたりする場合）が強いことが反映された結果だと考えられる。既往の研究でも，出身地と就学地域（大学所在地）が異なる場合，距離的な関係から，社会的ネットワークの影響は限定的であることが明らかにされている（岳ほか，2004）。

結　論

本稿では，中国の大学生が就職活動時に社会的ネットワークを利用することについて，どのように考え，またどのような時にそれが有効なのかを復旦大学と蘇州大学でのアンケート調査を通じて考察してきたが，そこで明らかになったことは以下の通りである。

第一に，両大学ともに，積極的とは言えないにしても，就職活動の際，社会的ネットワークを使うことは必要だと考えており，またそうした社会は今後も継続するとみていることである。第二に，社会的上昇を行うための条件として，理想的には「才能」や「関係」を重視するという回答が多かったものの，そのうち「才能」には，権力やお金といった手段も含まれ，時にはそのような手段を通じて就職活動を行うこともやむを得ないと考えていることである。第三に（クロス集計表から），復旦大学の上海出身者（上海戸籍保有者）ほど，また女子学生ほど関係を使うことに肯定的であることなどである。

上記第一と第二の知見は，部分的に既存の研究結果とも一致することから，とりわけ強調すべきことではないが，第三の知見について，地域が異なる（上海市・復旦大学と蘇州市・蘇州大学）ことで，社会的ネットワーク利用への考えが異なることは新たな発見であり，本稿の意義を示したと言えよう[13)]。

総じて，一般的には中国の大学生は，一般労働者（高校卒も含む）と比べて，相対的に開放的な労働力市場に身をおいているとみられてきた。ところが，実際には，本稿での考察からも明らかになったように，性別（女性）や出身地（上海戸籍保有者）などの違いが影響し，またこれらの違いの強弱によって，就職活動時における社会的ネットワーク利用やその考え方に差が生じている可能性を指摘できるのではなかろうか。改革開放（1978年）以降の市場経済の発達以外に，戸籍制度（地域間移動を制限）や旧来からの分権化政策がこれらの考え方の違いを規定していると思われる。

引用文献

（英語）

①Granovetter, M. S. [1973] "The Strength of Weak Ties", *The American Journal of Sociology*, 78 (6): 1360-1380.

②Granovetter, M. S. [1995] "Getting a job (2nd ed.). London University of Chicago Press.

③Wank, D. L. [1999] "Commodifying Communism: Business, Trust, and Politics in Chinese City", Cambridge University Press.

（中国語）

④馮伯麟 [1995] 市場経済条件下的社会心態研究，*社会学研究*，1995年第5期。

13) 今後，本稿と同様の調査（サンプルサイズを増やして）を行いたい。今後の課題としたい。

⑤胡永遠，馬霖，劉智勇［2008］個人社会資本対大学生就業市場的影響，*社会学*，2008年第6期。
⑥莫栄主編［2004］《2003-2004年：中国就業報告》中国労働社会保障出版社。
⑦孫鳳，謝維和［2008］行業吸納大学生就業的投入産出分析，*中国人口科学*，2008年第4期。
⑧楊東彭・王金釗［2008］大学生就業中的社会関係網絡使用状況調査研究，曽湘泉等著《中国就業戦略報告2007：労働力市場中介与就業促進》中国人民大学出版社。
⑨姚裕群［2008］我国大学生就業難問題演変与近期発展趨勢，*人口学刊*，2008年第1期。
⑩阮丹青［1990］天津城市居民社会網初析，*中国社会科学*，1990年第2期。
⑪岳昌君，文東茅，丁小浩［2004］求職与起薪：高校卒業生就業競争力実証分析，*管理世界*，2004年第11期。
⑫趙延東［2002］再就業中的社会資本：効用与局限，*社会学研究*，2002年第4期。
⑬鄭　潔［2004］家庭社会経済地位与大学生就業，*北京師範大学学報（社会科学版）*，2004年第3期。

（日本語）

⑭小松　出［2007］「中国青年層の就業状況と就業意識について」『桜美林大学産業研究所年報』第25号，2007年3月。
⑮辻康吾他編［1991］『もっと知りたい中国Ⅱ　社会・文化編』弘文堂。
⑯菱田雅晴・園田茂人［2005］『シリーズ現代中国経済（8）経済発展と社会変動』名古屋大学出版会。
⑰丸川知雄［2002］『シリーズ現代中国経済（3）労働市場の地殻変動』名古屋大学出版会。
⑱リン・ナン著，筒井淳也，石田光規，桜井政成，三輪哲，土岐智賀子訳［2008］『ソーシャル・キャピタル　社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房。

（受付　2010年5月17日）